

西条市学校適正規模・適正配置等審議会（第6回）議事録

日時：令和6年11月21日（木） 13時30分から15時20分まで

場所：庁舎本館5階大会議室

出席委員：17名 ※欠席委員3名

1 開会

2 議題

(1) 丹原・小松地域の学校適正規模・適正配置に係る計画（案）について

資料1【丹原・小松地域小中学校の学級規模の推移】、資料2【学校間の直線距離（丹原・小松地域）】、資料3【丹原・小松地域の適正化計画（案）】、資料6【統合に係る通学距離について（丹原・小松地域）】を説明

(2) 特色ある教育の展開について

資料4【西条地域の適正化計画（案）モデル校】、資料5【丹原・小松地域の適正化計画（案）モデル校】を説明

3 意見交換

■委員

今回市長選があり、現市長と新市長の思いが非常に違っているようだが、審議会は最後まで行い答申まで必ず進めていただきたい。また、現状を理解し寄り添い、教育関係者、子どもたちの将来に有益な結果を残すことをお願いしたい。新市長が統廃合の見直しを統論会で発言しており、youtubeでも動画が上がっている。見直すという点は大事なことも知れないが、市長が変わることによって空白の時間を作ってはいけないとPTAは思っている。審議会の一員として、またPTAとして、子どもたちの将来を考えた上で、学校規模等の適正化が不可欠であることを証明する必要があると思っており、今一度、幅広い範囲でアンケートを取り、その結果をもとに情報発信できるようお願いしたい。

□事務局

まず、審議会については、教育委員会から、学校規模適正化等についてご意見をいただくべく諮問していることから、この審議会は続けていただき答申は必ずいただきたいと考えている。アンケートについては、ご要望としてお伺いするが、教育委員会としては、この審議会の中でも説明してきたとおり、子どもたちの未来の教育環境を考えた上で、この学校規模等の適正化は必要な取組みとして、市議会などに対しても同様に説明してきたことから、この考え方が変わることはない。新市長の考えというのは、今はまだ就任前であり、実際には具体的に伺っていないが、教育委員会としては、この取組みを進めていきたいと考えており、また、アンケートについても必要があれば対応したいが、今のところは考えていない。

■委員

中川小の小規模特認校のところがよく分からなかったが、1回は5校で統合してその後で外れるということか。

□事務局

配布資料の図表の中では、議題1で説明したとおりの5校統合という形で記載しており、そのうちどこかの1校を例示する中で、候補として中川小を説明したが、丹原地域で小規模特認校1校の設置を検討しようとするもので、実際、設置した場合は残りの4校での統合となり、小規模特認校は学校区をそのまま残しながら存続する形になる。

■委員

それに意味があるのか。例えば、中川小の保護者がそれを望むのか、よく考える必要がある。地区懇などで意見を集約する場合、子どもたちは例えばクラスマッチもできないなど、ある程度のマイナスを背負っていくことを理解し、判断

して、賛成するのかというところを整理しておかないと、保護者の願いと地域の願いがズレていることはよくある。新居浜市の若宮小の時も、地域は惣開小と一緒にすることを望んでいなくて、保護者はほとんどが一緒にすることを望んでいた。そのようなところをきちんと整理しておかないと、あとあと問題が起こるのではないか。

□事務局

お見込みのとおりと思われるが、その辺りについても地域の声を聞きながら丹原地域で小規模特認校の設置を検討するということである。中川小は、一例として挙げたが、この地域で小規模特認校1校の設置を検討していく、また、地域の声や保護者の声を十分伺いながら検討していくということでご理解をいただきたい。

■委員

田滝出身だが、小規模特認校の設置は、まさに田滝地区が望んでいる学校だと思う。田滝小は現在、校区外通学を認めてもらえる特例校として存在している。それは自治会長、地域が望んで動いて、存続のため、生徒を集めるために校区外通学を認めてもらうよう、私も一員として運動してきた。例として中川小学校を挙げられた時、正直、私の中では地域が望んでというところを理解しているのかというと、自信を持って田滝地域は自治会でそのような学校を守っていきたいと思っている。小規模校というとマイナスイメージが多いかもしれないが、少ないなりに地域の方々が協力してくれて、他の学校では体験できない地域活動をしているので、そのようなメリットもあることをお伝えしたい。

□事務局

小規模特認校制度のメリットについては、小中一貫教育も同様であるが、小規模校を存続させる必要がある上では有効な方策と考えている。よって、当該制度のメリット、デメリットについては、小規模校のメリット、デメリットと重複する内容になり、これについては、

文科省のマニュアルの 33 ページ「第 4 章小規模を存続させる場合の教育の充実」や第 2 回会議の配布資料「小規模校のメリット、デメリット」、これらを再度ご確認くださいと思う。また、これら制度の特徴として、第 3 回会議資料「学校規模適正化に向けた対応策」でも説明したように、小規模特認校制度については、特色ある教育の展開により、学区外からでも入学を許可できるもので、学校の魅力を高めることで児童を募集できるという特徴がある。小中一貫教育校については、初等教育と前期中等教育の課程を調整して一貫性を持たせた体系的な教育を行えるもので、小中で一定の集団規模を確保できるという特徴がある。

■委員

答申は 12 月になるが、その中では小規模校の立地に関して、地元の理解などの協力体制が十分に得られる地域であることに配慮して選定することを、附帯意見のような形で盛り込むことが必要ではないか。あと、小中一貫教育についてであるが、モデル校という位置付けで、とりあえずⅡ期の 32 年までに統合して、その後、そのモデル校を他地域にも広げていく考えはあるのか。

□事務局

今までの会議内容を踏まえて答申案を取りまとめた。小中一貫教育のモデル校の先の展開についても、今は具体的な話はできないが、あくまでも、モデル校として設置して、その優位性などを検証した上で考えたい。今後の検討課題として捉えている。

◆会長

他自治体でも、小規模特認校や小中一貫教育校が次々できているので、西条地域や近隣の状況を見ながら、利点があれば、今後も展開していこうという方向性ではないか。

■委員

西条西中学校区の小中一貫校の提案は、非常に面白い取り組みだと思うが、まず第 1 段階で、禎瑞、氷見、橘の 3 つの小学校を統合して、しばらく様子を見て西中学校と統合ということだが、やり方としてこの両者を一気に小中一貫校という形にして、地域や保護者に理解を得る方がうまくいくのではないか。

□事務局

地域でどういう意見があるかにもよるが、合意形成を考えた場合、Ⅰ期で小学校を統合し、その後、Ⅱ期で小中一貫校にと考えており、まず小学校の統合に多くの時間を要することも想定している。地域で説明をしていく中で、合意形成が素早くできるようであれば、Ⅱ期の小中一貫教育校についても早めていければと考えている。ただ計画としては、Ⅰ期に小学校の統合、Ⅱ期に小中一貫校の整備として、その上で、地元協議などの進捗を踏まえながら計画の見直しも考えているので、ご理解をいただきたい。

■委員

やはり、保護者の気持ちもあるが、小中一貫校であれば 1 つの敷地の中に両方が入ること

になるので、2度の整備となると費用的にも非常に無駄が生じるのではないかと。最初から計画で大きく掲げ、そこへ向かって理解を得ていく。少々時間がかかってもそのようにしていく方が、かえって良いのではないかと。

□事務局

お見込みのとおりで、そういう形で地元の説明を進めてまいりたい。

◆会長

西条西中学校区の小学校3校がどこかに一本化される場合、手順が簡潔であれば、2ステップでいいと思うが、このように新しい学校を作っていくとなると、2ステップというのは、関わっている方々の負担は大きくなる。未来にあるものが他の統合と少し違ってくる。

■委員

地域では、年代によって意見が違う。概ね50歳以上は統合反対。30歳から50歳までの間の人はどちらでも良い、子どもたちも卒業したからどうなっても構わないという意見。PTAは、それなりの人数がいる学校の方が良い。世代ごとに意見が分かれ、地区によっても、田野小、中川小ともに存続を希望して統合に反対している。しかし、子どもの数やその他の条件を考えると、多少やむを得ないという考えも出てきている。中学校を統合ということで、第1段階となっていたが、丹原もそのままモデル校ということで小中一貫校と説明して、その上での小規模特認小学校という話の方がいいのではないかと思う。例えば、丹原地区の田滝小が残った場合、あそこが存続するのであれば、自分たちの小学校もそのような形で残してくれるのではないかという意見になる。要するに足の引っ張り合いになるので、できれば全てを統合して、その上での話にするとした方が良い。

□事務局

丹原地域にも小中一貫校をとということについては、先ほど説明したように、西条地域でのモデルとして1校を立ち上げ、その他地域については考えていないところであるが、今後、地域に説明していく中で、十分に説明しながら理解を得て合意形成を図りたいと考えている。

■委員

確かに、今の段階では難しいことは分かるが、地元としては、20年後生きていないから分からない、どのようになるか分からないから構わないという意見をそのままぶつけられる。やはり、孫のことやその下の子のことを考えれば、将来的にはこうなるという説明でない限り、丹原地域の特に田野地区、中川地区の人は納得しない。立地条件的にも、中川小や田野小が丹原小に通うのであれば、距離的に遠くなる。湯谷口のあたりから丹原小まで行くのは、スクールバスが出たとしても難しいのではないかと。災害などを考えれば、丹原地区は河川が氾濫すると必ず冠水して機能しない。山手の方が良いとして、中川小にすれば、土砂崩れなど自然災害がある。そうすると、あまり影響のない田野小を残せば良いという意見が出て、自分達に都合のいい話に必ずなる。それを納得させるなら、10年、20年後には、こうなるからこうさせてほしいという計画がない限り誰も納得しない。人数が多いところに行くのが当

然ではないかという考えになり、中川、田野、田滝にしても、寂れる一方で何の手立てでもできないので、20年後を考えた上で、10年後にはこれをしておくという説明の方が良い。

□事務局

この計画は、これまでも説明してきたが、10年後に見直しを考えているので、その際には、その検討もできればと思う。また、小規模特認校や小中一貫教育校の展開なども、見直しの際には検討するというようなことを、例えば答申の中でご意見として加えることもできる。ただ、それが実現するかどうかについて、この場で即答するのは難しい。

■委員

小松地区の小学校の統合は、児童数からしてもやむを得ないことではあると思うが、I期計画の統合の時に、中学校のところに小学校を持って行って小中一貫校にできないのか。昭和30年の小松町と石根村の合併の時、小松中学と石根中学があった時に、市町村合併で中学校の統合も協議に出て、町中、村中で議員も含めて議論して、結局落としどころが、行政区域の境でどちらからも通学が可能な範囲に中学校を持ってきたという経緯がある。これは7年ぐらいかかったと思うが、そのような経緯もあるので、小松と石根の小学校の統合であれば、小中一貫にならないか。それと、児童生徒数の推移で、令和6年5月1日現在の児童生徒数からの推計となっているが、今の0歳児から6歳児までの実数から児童数を推計できないのか。その方が現実味もあり、それをスライドする方が良いと思うが、推計の仕方も少し疑問がある。

□事務局

推計については、令和6年度の実数値から推計しており、社会保障人権問題研究所の人口減少率を使用している。もともとは、総合計画の中の人口推計を用いていたが、国勢調査の数値を使っているため、少し古い推計になっていた。それを補正するため、令和6年度の実際の人口、小中学校の児童生徒数を使用した上で推計し直しており、この資料については、直近の数値を反映したより確実性の高いものになっていると考えている。推計の仕方については、直近5年間の実数で増減率をとって、10年、20年、30年後の児童数生徒数を推計するというようなことも試みたが、その値を取る5年間で、年度間に急激な増減が生じているようなことがあった場合は、その率に引っ張られて極端には消滅してしまうようなところも出る状況も見受けられた。そのため、長期的な推計については、社人研の出している増減率を用い、直近の数字に置き換えた上で増減率を流していく今の手法を採用することとなった。また、先ほどと同様であるが、審議会のご意見として、小中一貫校の展開を今後検討していくよう答申いただけたらと思うので、ご理解をいただきたい。

■委員

中学生の生徒数が減って教室が空いて、そこに小学校の児童が入れたらいいが、入れなかったらどこかには新しい施設がないと。あそこに中学校ができたという昔からのいきさつがあるので、その点を踏まえていただきたい。

■委員

先ほどから同じ意見が出てきている。小学校3つを集めてよりも、いっそのこと塊で地域を全体としてよくした方が良いのではないかとことを言っている。その点に関して、ご理解いただきたいという次元の問題ではなく、じゃあ取り組んでいきましょうとしてもらいたい。審議委員として意見を言って、参考にさせてくださいということでは困る。我々も地域をずっと見てきて、こうじゃないとやはり難しいだろうと考えているので、しっかり取り組んでいただきたい。この提案をどうしても譲れないという言い方に聞こえる。この提案は非常に素晴らしいと思うが、いろいろな修正をするために審議しているのだから、地域の方々や保護者の方にはまずこの意見を優先した上で提案し、それで駄目なら2段階でとしていただきたい。

■委員

小規模特認校について、おそらく今の田滝小をイメージしていると思うが、なぜあのような教育が成り立つかということ、子どもの数が少ないというのがある。それと同じものを求めると、複式学級のような状態になる。そうすると、今回の統廃合、複式を解消していくということと相反するような気もするし、教職員の負担軽減からは、わたりの授業も大変なので現場としてはどうなのか。田滝小は決して特別な教育課程を組んでいるわけではなく、教育特区でもない。そのため、市が独自に今の体制を認めているということなので、その辺りを考えないと。魅力ある学校をつくるということで、小規模なら魅力的かということ決してそうではないし、不登校の子どもたちが行きやすい学校になるまでに、田滝はすぐに今の状態になっていない。至るまでの歴史があるので、形だけでは無理だと思う。また、登下校に関しても、田滝小は保護者の送り迎えがベースとなっているので、位置も考えなければならない。このやり方自体は良いと思うが、いろいろな角度から見ないと、せっかくできたのに思っている魅力化ができていないということになる。2点目の小中一貫校に関して、小中が連携する学校の仕組みの何が大事かということ、何を目指す小中一貫校かというテーマを持っていないといけない。魅力の1つとして、小学校の中学免許を持っている教員が中学校へ行って自分の教科を指導するようなこともできるし、その逆もできる。専門的な指導ができる体制をとれることが魅力の1つだが、現場から言うと、今、教員はどの学校もカツカツ。本当に人が足りていないので、近隣の学校に行って授業してというのは、当然授業は準備も評価もするので1時間行ってやるだけではないので、人的余裕がない状態は1つ危険な面が見える。そして、施設の共有についても、可能なものと不可能なものが出てくる。例えば、プールの深さや体育館のバスケットゴールの高さなど細かいとこまで違ってくるので、すぐに1か所で一緒にできるかということ、クリアしないといけない課題もある。それと、小中一貫校は同じ敷地でなくてもできるはずと思う。本来は決めた方がいいが、西中の敷地内で整備しなくても良い。小中一貫の体制を取って軌道にのせてから動く、ワンステップ、ツーステップ、スリーステップぐらいで統合していくのも1つの方法だと思う。そのようなところも加味した計画であれば良いと思う。

◆会長

小中一貫教育に向けての論点で、こういうところを検討しておかないと中々難しいが、令

和 17 年なので、10 年あればというところで、教員不足も少し緩やかになっているだろう。施設設備のところは費用の話なので、ここでは難しいかもしれない。あと、大きなメリットは、やはり中 1 ギャップの解消であり、不登校の抑止という点である。小学校と中学校が綺麗に接続されているので、その辺りのデータが近隣の取組みなどから出てきたりすると、背中を押してもらえらると思う。

■委員

実際にこの話が進んでいって適正規模になる時には、おそらく私はもう子育てが終わっていて、ここにいる方もこの立場で残っていないと思う。答申がまとまって、意見を地域に持っていくと思うが、その際には、ぜひ今から産む世代とか、もっと若い世代もひっくるめてこの話を聞いてもらって、意見が出せるような形が取れると良い。実際に、今回の丹原小松地域を見た時に、他の地域では思わなかったが、中学校でも自転車で通学しないといけな距離感のところにあるようなところがあるので、小学校だけにとどまらず、中学校もスクールバスなど他の方法を考えなければならない。

□事務局

まず、計画案の策定後はパブリックコメントを実施しようと考えており、その中で一定の意見集約が見込まれる。さらに、地域で説明していく中では、そういう世代の方も踏まえた上で説明させていただきたい。中学生の通学については、今のところ具体的な案はないが、スクールバスではないにしろ、何らかの支援も検討したいと考えている。

■委員

丹原地域はたくさんの学校が統合するので、やはり場所はよく考えた方が良い。中学校が統廃合になるというのが前提なので、1 つの中学校が余ると思うと、どこかに寄せるのではなく、例えば丹原西中学校に小学生を寄せるとか、丹原東中学校に小学校寄せるとかで新しい学校を作っていくけど、仮にはこの小学校を使って、できたらここに移るという形で、施設面でも統合して良かったというものが欲しい。古い学校で、トイレの電気も暗く洋式はないとか、スロープがついていなくて体をちょっと怪我している子が苦労して教室に入らないといけないというようなことがないよう、子どもたちに優しい校舎ができたところへ入れてほしい。そのためにも、中学校が余るのであれば、あの広い敷地をうまく活かしたら良いと思う。ただ、通学が大変になるので、やっぱりスクールバスが絶対必要。もう 1 点は、丹原地域と小松地域の中学校が統合しても、最終的には単学級になることを考えると、クラスマッチができないのかと思ったら、そういう子たちの青春はどうなるのかなど、少し辛いなと思う。やはりⅠ期である程度手を打って、Ⅱ期の時はもう 1 回実行しないといけないし、Ⅱ期の手本になるようなⅠ期でないと、やって良かった、やると得という、Ⅰ期にしたい。統合して良かったという施設だったり、スクールバスだったりを盛り込んで、話を進めていただきたい。小学校をどこかに寄せてしまうと、どこかの学校が勝って後が負けたような気持ちになるのが 1 番嫌で、統合する上で精神的に越えにくい部分になってくるので、上手に場所選びをしていただきたい。子どもたち、保護者が喜ぶ統合であってほしい。

■委員

丹原地域は特に一遍に5校を統合ということで広い範囲で説明していくことになると思うが、資料の表で人数の推移などは、グラフで見せると急激な差がより危機感として伝わると思う。表をグラフで表示して、急いで統合してあげないと、子どもたちのためにならないという空気感に持っていくことも必要ではないか。

■委員

先ほど、住民の意見、地域の意見を聞くということで、現在、公民館にも教育大綱のパブリックコメントが届いているが、誰1人読みもしないし見もしない。それで意見を聴取したというのが現状だが、他の方法で意見を聞くことを考えないと本当に意見の聴取になったとは言えないのではないか。関心を持たせる方法を今から考えておかないと、数字やグラフを見せられてもピンときていないのが現状。自分たちの時にこうだったからまだ大丈夫という意識の人が非常に多い。意見聴取する時に、スクールバスの関係、丹原も小松も範囲が広いので絶対必要。その場合、どのような形にするのかという案も出さないと住民は一切納得しない。また、残された小学校、中学校の敷地を何に活用するのか、そのまま放置するのか。放置された場合には、草が生い茂っているままではいけないので、自治会などが管理するようになると思うが、そのようなとこまで全ての説明がなされない限り、誰もいい意見ですねと言わない。少なくとも現状でやってほしいという声に変わるのではないか。将来の夢を託せるような改革でなければ説明のしようがない。

■委員

中川地区で生まれ育って今も住んでいるが、やはり場所の問題がかなり大きいと思っている。前回の審議会で、新しい学校というのも1つであるが、第2回の審議会で事務局が市の財政面から統廃合を進めることは一切考えていないと説明していたので、それが正しいのであれば、原則、既存施設の利用ではなく、フラットに地域の声を聞いていただきたい。ただ一方で、市の財政面から統廃合を進めるということであれば、しっかり市の財政状況等も地域に入った中で説明していただかないと、なかなか理解が得られにくい。

□事務局

教育委員会としての考えであるが、統廃合ありきではなく、まず、子どもたちの教育環境を整えていく上で、学校には一定の規模が必要であるという考えのもと、その手法として統廃合があり、市の財政面の課題はさておき、子どもたちを考えた上での統廃合という結論に至っている。審議会の中でも、既存の施設に集約する前提ということを説明してきたが、その既存施設についても、今後、耐用年数等に応じ、必要な改修や改築などについては考えていく。ここで、適地を求めて新しい学校をとということになると、特に丹原地域については、10年間で統廃合を進めていく非常に緊急性が高い地域であるが、新しい場所を選定するにあたっては地域の合意は難しく、時間がすごくかかるのではないかと懸念もある。既存施設であっても、当然 そのままというわけではなく、その時の建物の状況により、必要な改築、修繕等を行って使ってまいりたい。新しく土地を求めて新築するというのはすごく時間がかかり、場所の選定など合意形成が難しいという点等を踏まえ、原則として既存施設を利用す

る考えである。

■委員

例えば、先ほどから話に出ているように、丹原地域だと丹原小が第一候補に上がると思うが、そうなると中川小は1番端なのでかなり時間かかると思う。新しい学校というのは1つの例だが、田野小というのも一案で、地域の声をしっかり聞いていただいて、丹原小ありきではなくフラットに考えていただきたい。

■委

冒頭あったように、新市長になってこれがどうなるかというのが、せっかく審議したのに意味がなくなるというのが1番怖いので、そこは考えておいて欲しい。今回、合併して今の小松中があるという話も初めて聞いた。確かにその流れでいくと、あの場所にあるのも不思議ではないが、Ⅰ期の時点で2学級あってⅡ期で単学級になるのは、Ⅰ期の間で見ておくべきところではないかと思う。個人的な考えだが、意図や歴史についてはよく分かっていないが、石根地区は丹原に近くて、小松はどちらかというと西条西中校区に近いというのもあって、行政区域の見直しのようなことも今後必要になってくるのではないか。西条だけではなく丹原・小松地域の方にとっても、市政20周年を迎えて、これから何十年後かも、そのような話を少しでもしていった方が良いのではないか。

■委員

スクールバスの導入を計画に入れるということで、当然通学距離が長いから入れるということもあるが、もう1つとして有害鳥獣の被害がある。今、小学校、中学校の通学路に猿が2、3メートル近くまで軍団で来る。イノシシは夜行性なのに昼間から住宅街でうろうろしている。行きは保護者や地域の人が見守って、帰りは学校まで迎えに行くか公民館まで迎えに行く形で対応しているが、通学距離が長くなれば、このような有害鳥獣の被害から守るということも1つ理由に入れてほしい。

■委員

小学校同士の統合になった場合、児童には様々な問題が起こると思う。不登校になったり、ストレスがたまって問題を起こしたりとか。現在でもあると思うが、そのようなことが増えるのではないかと思う。統廃合はやらないといけないと分かっているが、子どもたちのことを第一に考えて進めるようにお願いしたい。

■委員

統合する際に、新しい敷地やどこかの学校に寄せるという話が出ているが、今の中学校の位置は大体どこの小学校からでもいい距離にあって、同じ敷地内とかで小学校が始まっていずれ小中一貫になるというのは非常にいいなと思った。小松に関しても、小松中学校は石根小、小松小のちょうど中間あたりにあって、合併して新しい学校になるまでどちらかの小学校を使うとなると、石根の子が小松までは遠いし、逆に小松が石根までは遠いので、小松中の敷地などをうまく利用して、将来的な小中一貫も見据えての働きかけ、地域住民の方に話して

いくのも一つの方法かと思った。スクールバスが出たが、以前、山の学校にいた時に、村が定期券の購入などの補助をして、スクールバスではなく一般のバスを使って通っていた学校がある。スクールバスや運転手を用意すること以外に、市内を走っている一般のバスを利用する方法も考えていくといいのではないかと考えている。

■委員

第1の論点は、統合して新しい学校ができる時に、どの校舎に通うことになるのかということ。小中一貫教育校の取組みは非常に魅力的であるが、一方で、早急に進めていくことは、決して子どもたちのためにならないのではないかとも思う。小学生と中学生は全く違うので、そこを急に、隣接の校舎で全てを一緒にしましても負担になる。もう1つは、5つ又は3つの小学校が1つになるということに関しても、例えば、同じ教科書を使っているのに、どのような力がつくかというゴールは一緒だが、その教科書をどのように使って、どのような形で勉強していくかというのは、それぞれの学校にやり方や文化があり、ちょっとしたことで変わると、子どもたちにはすごくストレスになる。3つの小学校を1つにしていこうためには、大人側の教育目標が何なのかということもあるが、子ども側で具体的にイメージすると、一緒に活動したりして顔見知りになってということが想像されるが、そのようなプロセスを経て、1つになっていかないと、子どもにすごく負担になる。小学校と中学校では全く発達段階が違うので、準備期間を経て、子どもたちにストレスがないよう進めていただきたい。しかし、小中一貫教育校は、例えば6年生と中1は発達段階もすごく近いので、今でも交流はしているが、そのようなことを上手に進めていくと、中学校に上がった時のストレスがなく理想的な繋がりができると思うので魅力的ではあるが、準備期間を経て進めてほしい。

■委員

30年くらい前に幼稚園だけでは成り立たないということが数的にも見えていて、幼稚園と保育園が今の子ども園という形で、0歳児からの預かりにならざるを得ないだろうし、幼児教育、保育に携わる者の必然で、必要だと思っていた。ただ様々な問題があって、松山や東京でできず、西条でもやっと実現することができ良かったが、今5年目を迎えてやはり違うのだと今更実感してきた。発達、保育と幼児教育という形で長年やってきたものが1つになるには本当に時間がかかる。それが組織や形とかはもちろんであるが、関わってきた人間として実感するのも数年かかる。今この議論の中で、やはり夢や目標がないといけない。10年、20年先どうなるか分からないが、大きいことを次々されてしまうと困るということはよく分かって、一方で目標はぶれないように時間をかけてやっていく。今この幼稚園60人くらいの規模でゴたゴたしているのに、それがもっと地域が広がった時には、結局どこにしわ寄せがいくかということと子どもにいくわけで、やはり大人が目標をぶらさないようにということは大事。現実を見据えながらやっていくことも必要。小学校や高校の先生をされた方々とこのことを話して、地域がなくなる危機感を実感として遠いと思った。やはり地域からすると、子どもというのは希望であって未来だと感じる。また、2つのものを1つにすればいいというわけでないという意見も聞いた。現実があっても少子化ももっと進むはずで、その中でより良いものを作っていくといけない。目標を掲げてじっくり時間をかけていくが、その中で大人がしっかりぶれないということ、とりあえずではなく目標を持ちながら、でも時

間をかけてやっていかないと大変だと感じた。

■委員

特別支援学校と中等教育学校で勤務経験があるので、スクールバスにはずっと関わっていたが、運転手の確保がものすごく大変。スクールバスは、朝 6 時くらいに出庫して 8 時ぐらいまでに戻ってきてもらう。帰りは、経験上、早便や遅便もあるとなると、14 時半とかに出勤し 18 時くらいまでの勤務になる。気象状況などで臨時休校にすれば、こちらのリクエストに応じて 11 時ぐらいに来てもらって、午後すぐの便を出すとか、ものすごく変則的な勤務のため、ドライバーの確保が難しい。もちろん添乗員が必要で、誰でもいいわけではなく、子どもの様々なトラブルや不足の事態に対応できるようなスキルを持った者を配置する必要があるため、この工面はものすごく大変だった。先ほど、路線バスとの協力という話もあったが、もしこのスクールバスを市内に新しくできた学校に設けるのであれば、相当早い時期から路線バスとの連携や学校間で連携して運用できるような仕組みづくりも必要だと思うし、就業する方の確保や、添乗員には地域や PTA などの協力も必要ではないか。

◆会長

やはり、モデル校をどこに置くかは様々な意見があったような印象である。小規模特認校や小中一貫教育校の意見が多かったが、進めていく上でハードルがたくさんあり、教員負担、教員配置、カリキュラム等々、その他はスクールバスについても重要な論点である。それでも、子どもたちの幸せとより良い成長のためにという理念のもと再編を考えていくという、その辺りの合意は得られたと思う。あとは、形骸化した従来のパブリックコメントではなく、特に若い方、これから西条市を支えていこうという 10 代、20 代の方々に意見をいただくような手立てを打ってほしいという意見もあった。

4 閉会